

## 老朽水道管 滞る更新

昨年9月に有斐閣から出版された『現代社会資本論』においても、社会資本の老朽化は、経済や生活を左右する、喫緊の課題として問題を投げかけている。毎日10月7日夕刊の表題記事に注目したので、抜粋して紹介する。

水道インフラの老朽化が全国で深刻な問題になっている。和歌山市では3日、紀の川に架かる水管橋が崩落して市民生活に大きな影響が生じ、生活インフラの大切さと維持の難しさが改めて浮き彫りとなった。いち早く都市基盤の整備が進み、水道管の老朽化率全国ワーストの大阪市の現場を訪ね、全国的に更新が進まない事情を探った。

大阪市では、総延長計約5200<sup>キ</sup>のうち、老朽化率は49.2%(19年度末)で、全国の主要都市で最悪だ。なぜ、古い管の交換はなかなか進まないのか。理由を知るために大阪府中央区の工事現場を7月に訪ねた。「まずは水道管が埋まっている位置を見つけるのが大変なんです」。市水道局の担当者が教えてくれた。市内には1955年以前に敷設された水道管が少なくない。正確な設置時期や図面などの資料が残っていないことが多く、そもそも、どこを掘ればいいのか正確に把握するのは難しい。

この現場では、直径15<sup>センチ</sup>の水道管を取りだすため、水道管の方向に沿って幅約80<sup>センチ</sup>の穴を成人の背丈ほどの深さまで掘り進めていた。市街地の地中には水道管に加えて、ガス管、電線、光ファイバーケーブルなどが複雑に埋め込まれているため、傷つけないように掘り進めなければならない。事前に図面で管の埋設場所を確認しても、「実際に掘ってみると、図面にはない管が見つかるケースもある」(市担当者)という。取り出された古い水道管は外側の塗装がはげて、部分的にさびていた。作業員らは新しい管を地中に埋め込んで、上から土をかぶせた。



作業はこれで終わりではない。工事中の断水を避けるため埋め込んだ仮設の水道管を取り除かなければならない。道路の舗装も必要だ。さらに、新しく埋設した水道管の水質試験も必要になる。この現場では長さ約1<sup>キ</sup>の水道管交換に約2年を要し、約2億円の事業費がかかる。市内では同様の工事が50~60カ所で並行して続けられている。それでも現在の態勢では年60~70<sup>キ</sup>を交換するのが限界で、老朽化率は年々上昇している。

市が活路を求めたのが民間企業の資金やノウハウを生かすPFI方式だ。市は20年1月、全国の自治体で初めて、水道事業のうち水道管の更新を民間で運営する方針を示した。20年10月に公募を開始。3750億円の予算で、約1800<sup>キ</sup>の水道管の更新工事を16年間で実施する条件だった。二つの企業グループが関心を示していた。ところが今年9月、関心を示していた2グループがともに応募を辞退してしまった。

(2021年10月13日)